平成 24 年 7 月号　№429

なかま

発　　行
佐倉市立中央公民館
編　　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

花笠まつり---------- 伊藤　信子
少年時に住んだ大連の思い出--- 中村　一郎
「個人版私的整理」は助け舟になるか 廣吉　正毅
東京スケッチブック---------- 西脇　弘子

あれから1年

鵜木　聖次

「大震災日の翌朝、港で3人の遺体を目の当たりにした時は、何ともやるせない気持だったなぁ。あれから1年、色々な事が走馬灯の如く脳裏を駆け巡ったよ…」と、話し始めたが直ぐに口籠ってしまった。生気のない、正に憔悴した面持ちの眼鏡の奥に光るものがあった。多分、あの日の惨状が瞼の裏に浮かんできたのでしょう。これは、昨年の東日本大震災から1年が過ぎた3月の中旬、私が福島県いわき市に行く機会があり、そこでたまたま、被災された小名浜港の50代の漁師さんと話をした時のことである。

彼は続けて、「現在、小名浜港では沿岸漁が自粛されているけど、一部の漁師だけが、放射線量の測定用としての漁獲が許可されているんだ。出漁出来ない漁師、私もその一人なんだ。辛いなぁ、早く漁に出たいよ」と、嘆息混じりの言葉であった。また、幸いにも家族は難を逃れることが出来たことや、家が半壊したこと、さらに船の被害も大きかったこと等も語ってくれた。

それから、私は彼に現在の生活状況と心境を聞いて見た。すると、「食べて行かなければならないので、瓦礫（がれき）の処理作業で何とか糊口を凌いでいるよ。だけど、瓦礫の処理の進捗状況は芳しくないなぁ。1年経つのに殆ど片付いていないよ。政府は全国の自治体に瓦礫の受け入れを要請しているけど、スピード感がないねぇ。そこで無理かなとは思うけど、これから数年、或いはそれ以上、居住出来ないと言われている地域があるんでしょ。それなら、当面はその地域を瓦礫の集積保管場所にし、その後じっくりと方策を練って行けばいいんじゃないの」と、本音を語ってくれた。話の中の瓦礫については隔靴掻痒（かっかそうよう）の感があることが、彼の口調から伝わって来るものがあった。

それから、「余談だけど、岩手県の被災地で、建物の上に鎮座している船の姿が、何度かテレビに映し出されていたよね。多くの人が目にしていると思うけど、船籍は小名浜港で、たまたまドック入りしていて、津波であの状態になったんだよ」とも言っていた。今思うと、その船はいわき市小名浜にも目を向けて欲しいと、雄叫びにも似た形相で、精一杯メッセージを発していたのかも知れない。

何はともあれ、被災された方々が一日でも一刻でも早く本業に戻れるように、また元に近い生活が出来るようにと、願わずにはいられない。

（編集委員）

花笠祭り

私には26年続いている真夏のひそやかな楽しみがあります。それは本場山形の花笠祭りパレードで踊ることです。山形市役所前のメイン道路1.2キロを、八月五、六、七日の3日間に分かれて総勢1万2千人の踊り手が、其々の衣裳で、華やかに花笠踊りの競演を繰り広げます。

私が入会した当初の千葉花笠会は、30人にも満たない小人数のグループでした。初めて本場山形で踊った時の感動は今でもはっきり覚えています。道路両サイドの大勢の観客の拍手や、カメラのフラッシュに笑顔で答え、テレビ局の強烈な大型ライトに緊張がはしり、そして、新聞社の腕章をつけたカメラマンの迫ってくる大きいレンズにどきどきし、何もかも初めてのことで突然スターになったような気分でした。無事に1.2キロの道のりを踊り終えた時の達成感と安堵感は忘れられません。グループの中で私を独身と勘違いした一人の男性に「息子の嫁に」と真顔で言われびっくり、バスの中はその話題で大いに盛り上ったことがいま懐かしく思い出されます。

その後会員数が250人を超え練習会場の確保等が難しくなり、6年前から佐倉地区と成田地区に分かれて活動しています。昨年春震災が発生し、東北のお祭りも危ぶまれ、会員の中にも心配する声がありましたが、最後は皆の気持ちが一致し例年と変わらない人数で参加する事ができました。皆の心意気を伝えたく「がんばろう東北」と書いた手作りのワッペンを鉢巻に貼り、精一杯の祈りを込めて踊りました。

とっても楽しい会なので、今後も元気な間は参加したいと思っています。

（宮前　伊藤　信子）

「個人版私的整理」は助け舟になるか

早いもので、東日本大震災から一年余りが過ぎた。千葉県の沿岸部でも地震・津波・液状化現象でひどい目に遭い苦労している。更に原発事故も他人事ではない。

そんな折、被災地では「個人債務者の私的整理に関するガイドライン」、略して「個人版私的整理」が話題にあがっていることを知った。これは政府の「二重債務者問題への対応方針」を受けた民間金融機関などで作られたものだ。東日本大震災や原発事故で借入金を返済できなくなったか、またはその恐れのある債務者が対象となる。金融機関は債務者が自己破産することなくその暮らしや事業を再建し、ひいては被災地を復興させることを支援の目的とすると言う。

つまり債務者は自己破産と言った手続きを経ずに借金を免除してもらい、改めて金融機関から生活再建のお金をも借りることが出来る有難い仕組だそうだ。

だが貸し手にしてみれば借金を棒引きするのだから、返済計画を厳しく審査し簡単には貸し付けないだろう。

一方債務者にしても返済計画に厳しい条件をつけられれば、使い勝手が悪く二の足を踏みはしないだろうか。結局自己破産を選んでも大差ないと債務者は考えることにならないか。二重債務問題は今後の復興の良否に影響してくる。

今、早急に債務問題の抜本的対策が必要だと思う。

（ユーカリが丘　廣吉　正毅）

少年時に住んだ大連の思い出

私は、昭和19年～20年に関東州大連に住んでいた。自宅の前は、市電が走行し自動車馬車の往来で賑わっていた。

近所に二つの映画館があり、大きな看板が掲げられ、毎週変わるのが楽しみで、週に2回は映画館通いをしていた。観た映画は、想い出すままに、『ハワイ・マレー沖海戦』『加藤隼戦闘隊』『雷撃隊出動』『決戦の大空へ』『君こそ次の荒鷲だ』『燃ゆる大空』『将軍と参謀と兵』『愛機南へ飛ぶ』『かくて神風は吹く』『撃滅の歌』『愛国の花』『轟沈』『空の神兵』『陸軍』等々である。戦記映画に影響されて、大きくなったら陸軍幼年学校へ入って軍人になると言う強い思いがあり立派な軍国少年であった。

そして思いもよらぬ終戦、街の様相は一変し、町並みを長靴で闊歩するソ連軍女性兵士に好奇な眼差しを送っていた。休館していた映画館もソ連映画が上映されるようになった。映画館の人たちは変わらないので、顔見知りであり、「言葉が分からないから面白くないよ…」と言われたが、どんな映画か興味もあって軍票で入場券を買い観たのである。戦記ものの恋物語で、戦闘のため離散した男女兵士が死線を脱し、無事再会して歓び激しく抱き合うラブシーンがあって、私は驚き目を見張って見ていた。男女が手をつないだり、腕を組んで歩いている姿を見たことがなかったからだ。

やがて、街には若い日本の女性がソ連軍の将校と腕を組んで歩くカップルが現れ、12歳の少年には大きな衝撃であった。終戦までは「米英撃滅」「欲しがりません勝つまでは」を合言葉にモンペ姿で頑張っていたお姉さん達であったからである。

（西志津　中村一郎）

東京スケッチブック

雲ひとつない澄みきった青い空の下、季節に相応しい凛とした寒気の中、小学校以来の同級生七名が新年会を兼ねて東京見物に出かけました。この七人（男二、女五名）は、七年前から水彩画の写生会を定期的に続けてきた仲間たちです。

朝十時に東京駅からバスに乗り、まずは皇居前広場に到着です。♪ここが、ここが二重橋、記念の写真をとりましょう♪　ところで、楠木正成公像の顔が正面を向いていない理由、ご存知ですか。

お昼前に日の出埠頭から、東京湾ランチクルーズに出発。ランチビュッフェの間、完成間近の東京スカイツリーと東京ゲートブリッジ、東京国際空港と船はゆっくり進み、ゆったりとした時間の中、ワイン片手にとてもロマンチックな気分になりました。

陸に戻って今や懐かしの東京タワー、大展望台からの360度のパノラマビュー、雪化粧の富士山が素敵でした。最後は、♪さあさ着いた着きました、ここが浅草、浅草寺。お参りしました観音様。お祭りみたいに賑やかで、粋な気分になりました♪　今回はスケッチブックを持たずやってきた七人でしたが、頭の中にはこれから描いていきたい風景がしっかりと刻まれたようです。

卒業後私たちは社会の荒波に揉まれながら懸命に生きてきました。各人が各様の責任を果たした今、日日の生活が縦糸であれば、月に一度の写生会は横糸としてこの七人をしっかりと結び付けています。私はこの絆を大切に、焦らず一歩一歩、人生の絵筆を進めていきたいと思います。

（♪は『東京だよおっ母さん』）

（井野　西脇弘子）

７月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

さくら道

「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」で始まる鴨長明の『方丈記』は、鎌倉時代の１２１２年に完成し今年２０１２年は８００年を記念する年である。

５月に、公開講演会・シンポジウム「不安の時代をどう生きるか、鴨長明と『方丈記』の世界」を受講した。歌人の馬場あき子氏が長明の和歌について、宗教学者の山折哲雄氏がわが国の無常観について講演された。他に3人のパネリストが独自の切り口で、長明の和歌や管弦などの多才さ、災害描写の巧みさなどを分析されていた。方丈記の地震・津波、火事・辻風などの克明な記述は、読む者に昨今の震災や竜巻被害を思い起こさせる。

方丈記は、混迷する時代を生きた長明の感性や批判精神、方丈の庵での生活と閑居の楽しみや仏道修行のことなど、学びたい内容にあふれている。

（森山　義信）

あとがき

「花笠祭り」等の民謡踊りが地元を離れて各地にファンの会が出来、お祭り当日に地元の人達と交流を深める伝統は日本的な楽しみの一つだと思います。

東日本大震災と原発事故に伴う個人債務者支援対策に限らず、広域で、甚大な災害にあった被災者への対応の不適切さを改善するには、根本的には、日本が有数な地震国だということや、放射能廃棄物は原理的に廃棄処置不能物質だという純科学的な認識を持ち、全国民がもっと考え深くあって、長期的視野で考える事から始めないと、良い解決策は生まれないと思われます。

「大連の思い出」「小学校の同窓生との東京見物」共に、半世紀余の人生の歩みを、有意義に振り返っておられ、微笑ましく読ませていただきました。

（服部　一宏）